

#### 14) 新生児期に下肢麻痺で発見された神経芽腫の2例

浅見	恵子	・小川	淳	(県立がんセンター)
片岡	哲			(新潟病院小児科)
岩渕	真	・内山	昌則	
八木	実	・飯沼	泰史	(新潟大学)
金田	聡	・大滝	雅博	(小児外科)
新田	幸壽	・内藤	真一	(新潟市民病院)
荒井	洋志			(小児外科)

新生児期に下肢麻痺で発見され、その後神経芽腫と診断された2例を報告する。

**症例1** 正常満期産1歳10カ月女児：出生時より左下肢麻痺があり、リハビリテーションを受けていた。生後4カ月時に右下肢麻痺と腹部腫瘤を指摘され、右後腹膜stageⅢの神経芽腫と診断された。進行神経芽腫として治療を行なったが両下肢麻痺と膀胱直腸障害が残存して

いる。

**症例2** 正常満期産8カ月男児：生後1カ月に右下肢麻痺に気付かれ、下肢麻痺としてリハビリテーションを受けていた。生後3カ月に背部腫瘤を発見され、左後腹膜原発stageⅢの神経芽腫と診断された。進行神経芽腫として治療を行なったが下肢麻痺が残存している。

**考案**：出生時下肢麻痺のリハビリテーションに際しては神経芽腫も否定しておく必要がある。

#### 特 別 講 演

「胎児診断・治療の現状と将来への展望」

九州大学大学院医学系研究科小児外科教授

水田 祥代 先生